

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年八月二十七日(土曜日)午後六時三十分開演

演目解説(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

## 狂言 蝸牛(かぎゅう)

藪に居て頭が黒く、腰には貝を着け、折々は角を出す。それが蝸牛というものの。主人の祖父の寿命長遠のため、取って来いと命じられた太郎冠者は、藪に眠る山伏を見つけて早合点。山伏の頭には黒い兜巾とぎんが乗り、腰には法螺貝ほらがい、篠懸すずかけも角に見えます。生身しょうじんの蝸牛を連れ帰る際には、「でんでんむしむし」の囃子物に自然と心身が浮かれます。迎えに出た主人に叱られますが、冠者も主人も観客も、囃子物の魅力には抗しがたいものです。

## 能 三山(みつやま)

大原の良忍聖一行りょうにんじんじり(ワキ・ワキツレ)が融通念仏ゆづうを広めるために大和の国に入り、名所の三つ山近くまで来ます。そこへ里の女(前シテ)が現れ、万葉集で有名な大和三山のいわれを物語ります。それは香久山かかくに住む柏手かしわで(膳かしの)の公成きんなりをめぐる二人の妻の争いでした。公成は初め畝傍山うねみやまの桜子と耳無山の桂子かづらこを平等に愛しましたが、いつしか華やかな桜子の方に心が傾くようになりました。羨んだ桂子は耳無の池に身を投げたということです。跡を引く桂子の名を念仏の名帳みやうぢょうに入れるよう聖に頼んで、女は池の底に消えます(中入)。やがて回向する聖えこうの前に桜子を名乗る別の女(ツレ)が現れ、自分を狂わせる嵐を除けてくださいと頼みます。追いかけて桂子(後シテ)も再度出現します。彼女は桜子の美しさが妬ましくてならない様子です。興奮した桂子は手にした桂の枝で思うさま後妻うわなりの桜子を打ち据えますが、恨みが晴れたか、二人とも成仏することを願って去ります。

(西村 聡)

装束附 前シテ(里女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、増の面をかける。

後シテ(桂子) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、女増髪又は泣増の面をかける。